

(19)



JAPANESE PATENT OFFICE

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11) Publication number: 11299490 A

(43) Date of publication of application: 02 . 11 . 99

(51) Int.

C12N 15/09  
C07K 14/415  
C12N 1/21  
C12Q 1/18  
//C12N 1/21 , C12R 1:19 }

(21) Application number: 10150493

(71) Applicant KAJI AKIRA

(22) Date of filing: 23 . 04 . 98

(72) Inventor: KAJI AKIRA

(54) PLANT RIBOSOME RECYCLING FACTOR

(57) Abstract:

**PROBLEM TO BE SOLVED:** To obtain a new *frr* gene which consists of a specific gene coding for spinach chloroplast ribosome recycling factor (RRF), and is useful, for example, for the development of next-generation RRF-targeting antibiotics and herbicides.

**SOLUTION:** This is a new *fr* gene which codes for spinach chloroplast ribosome recycling factor(RRF) having a base sequence shown by the formula, and is useful, for example, for the development of next-generation RRF-targeting antibiotics and herbicides. The *fr* gene is obtained by screening a spinach cDNA library using an antibody against the chloroplast envelope membrane, purifying the obtained positive clones, and cloning by PCR using primers to both ends of the cloning site.

COPYRIGHT: (C)1999,JPO

9 14/17  
PP-1645/KJ

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平11-299490

(43)公開日 平成11年(1999)11月2日

(51)Int.Cl.\*

C 12 N 15/09  
C 07 K 14/415  
C 12 N 1/21  
C 12 Q 1/18

// (C 12 N 1/21

識別記号

Z N A

F 1

C 12 N 15/00  
C 07 K 14/415  
C 12 N 1/21  
C 12 Q 1/18

Z N A A

審査請求 未請求 請求項の数9 書面 (全 12 頁) 最終頁に続く

(21)出願番号 特願平10-150493

(71)出願人 591188479

梶 昭

東京都東久留米市大門町1丁目1番9号

(22)出願日 平成10年(1998)4月23日

(72)発明者 梶 昭

東京都東久留米市大門町1丁目1番9号

(74)代理人 弁理士 葛和 清司 (外1名)

(54)【発明の名称】 植物のリボソームリサイクリング因子

(57)【要約】

【課題】 RRF をターゲットとした次世代抗菌剤、除草剤の開発に資する。

【解決手段】 ホウレン草のクロロプラストのRRF、これをコードするrrr遺伝子及びこれらを除草剤の製造に用いる方法。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】ホウレン草のクロロプラストのRRFをコードするfrr遺伝子。

【請求項2】配列表1に示される塩基配列を有するホウレン草frr遺伝子。

【請求項3】配列表1に示される塩基配列において、1もしくは数個の塩基が欠失、置換もしくは付加された、請求項2に記載のホウレン草frr遺伝子。

【請求項4】請求項1～3のいずれかに記載されたfrr遺伝子によりコードされるホウレン草RRF様蛋白。

【請求項5】配列表1に示されるアミノ酸配列を有するホウレン草RRF様蛋白。

【請求項6】配列表1に示されるアミノ酸配列において、1もしくは数個のアミノ酸が欠失、置換もしくは付加された、請求項5に記載のホウレン草RRF様蛋白。

【請求項7】ホウレン草frr遺伝子を組み込んだプラスミド。

【請求項8】請求項7に記載のプラスミドを有する大腸菌。

【請求項9】植物のRRFを除草剤の製造に用いる方法。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明が属する技術分野】本発明は、真核生物のリボソームリサイクリング因子 (ribosome recycling factor, 以下RRF)、及び該RRFをコードする遺伝子 (以下frr)に関する。より具体的にはホウレン草のクロロプラストのRRF及び該RRFをコードする遺伝子に関する。さらに本発明は、そのRRFをターゲットとした次世代抗剤、除草剤を開発する技術に関する。

## 【0002】

【従来技術】蛋白質生合成は、すべての細胞の生命活動において必要不可欠な機能であり、「開始」、「伸展」、「終結」及び「リボソームリサイクリング」の四段階から成り立っている。蛋白質生合成における最終的なステップ (第4ステップ) は、次の「開始」段階へリボソームを再利用する為に、メッセンジャーRNA、転移RNA、リボソームからなる終結複合体を各々遊離、解離させることにより終了する。原核生物である大腸菌においては、このリボソームの「再利用」はRRFとエロンゲーション因子G (elongation factor G, 以下EFG) により触媒されることが分かっている。このリボソーム「再利用」の過程はJanosi博士による総説 (1996 Adv. Biophys. 32: 121-201)において紹介されている。一方、近年、従来の抗生物質への耐性獲得菌株が数多く報告されており、細菌の発育を直接的に制限し得る部位を標的とする、新たな抗生物質の開発が早急に必要とされているので、RRFが抗剤のターゲットとして

近年脚光を浴びつつある。

## 【0003】

【発明が解決しようとする課題】ところでこれまでに得られてきた蛋白質翻訳終結複合体の解離に関する結果はすべて、原核生物での研究が中心となっている。真核生物における重要な報告はいまだされていない。真核生物におけるRRFに相当する遺伝子の報告が成されていない理由の一つとして、この蛋白合成における最終段階の仕組みが原核生物のそれと異なることが挙げられる。すなわち真核生物におけるRRF様の機能蛋白はミトコンドリアやクロロプラストに限られている。もっとも、ミトコンドリアやクロロプラストは遺伝学的に細菌から起源していることがわかっているので、これらのRRFが特に細菌に重要であることが考えられる。

【0004】この結論を支持する一つの事実として、海底火山のM. jannaschii はその蛋白質生合成に関与する因子のホモジーが真核生物のそれと非常に高いことが知られているが (Bull 1996, Science, 273: 1058-1073)、RRF相当の蛋白は見られない。この細菌は蛋白合成系が真核生物と非常に似通っているにも拘らず、ミトコンドリアやクロロプラストにあたるオルガネルが存在しない。このことは、真核生物において蛋白質翻訳終結複合体の解離はRRFではない他の因子により触媒される可能性を示唆している。

【0005】第二に、真核生物のmRNAはモノシストロニックで原核生物のそれはポリシストロニックである (Kozak 1987, Mol. Cell. Biol. 1: 3438-3445; Das 1984, Nucleic Acids Res. 12: 457-4768; Schonera 1986 Proc. Natl. Acad. Sci. U. S. A. 83: 8506-8510; Sprengel 1985 Nucleic Acids Res. 13: 893-909)。従って真核生物においてリボソームのmRNAよりの解離が阻害されても下流のシストロンを影響することはない。然るに原核生物ではこのステップの阻害は原核生物のmRNAがポリシストロニックであるために下流のシストロンの翻訳を阻害することになる。

【0006】このように真核生物における蛋白質生合成の最終段階にあたる蛋白質翻訳終結複合体の解離という第4段階が原核生物のものと異なると考えられるので、新しい型の抗生物質の開発を目的として、専ら原核生物を対象として研究が進められている。従って、これまで真核生物の第4ステップについてはRRFの存在も含めて全く分かっていない。しかしながら、以上のことを勘案すると真核生物について、そのRRFの構造および性状を解析することは、種々の抗剤の開発に有用であるばかりか、特に植物のRRFは除草剤の開発にも極めて重要な情報となり得ると考えられる。

## 【0007】

【課題を解決するための手段】本発明者は上記の現状を踏まえ、RRFに関する研究を進める中で、真核生物である植物のRRFは植物のミトコンドリアやクロロプラストにおける蛋白合成に関与していること、この形質を同定すれば、ヒトには有害ではない抗生物質を開発する上で重要な情報となり得ること、また、その因子の機能を阻害すれば植物は生存しないこと、従って植物RRFの特異的な阻害剤は除草剤としての活用の可能性が充分考えられること等に着目し、さらに鋭意研究を進めた結果、ホウレン草のクロロプラストのRRFをコードする遺伝子frrを発見してそのRRFの一次構造を同定することに成功し、本発明を完成するに至った。

【0008】即ち本発明は、新規なホウレン草のfrr遺伝子及び該遺伝子がコードするRRF様蛋白、またホウレン草frr遺伝子を組み込んだプラスミド、該プラスミドを有する大腸菌さらには植物のRRFを除草剤の製造に用いる方法に関する。RRFの一次構造の解明は更に二次、三次構造の解明につながり、除草剤をはじめとして、種特異的な阻害剤をラショナルドラッグデザインにより設計することを可能とするものである。従って本発明によって示されたホウレン草のRRFの一次構造、及びその他の情報は産業上極めて重要な意義を有する。

【0009】さらに、前記の考察から分かるように、RRFをターゲットとした抗菌剤を開発する上でもこれら的情報は非常に重要なものといえるが、驚くべきことに、真核生物RRF遺伝子の存在と、それがコードしているRRFの存在によっては、大腸菌におけるfrr遺伝子変異を補い得る能力は有さず、むしろその阻害作用を示すことが本発明者によるホウレン草frr遺伝子を組み込んだプラスミドを有する大腸菌を用いた実験により判明した。このようにして大腸菌のRRFを阻害すると、大腸菌はその生理学的状況に拘らず死んでしまうことが分かり、RRFをターゲットとした抗菌剤は生育抑制のみならず殺菌作用を有することを示した。

【0010】即ち、本発明者は、ホウレン草frr遺伝子を組み込んだプラスミドによる大腸菌の温度感受性RRFに対する作用を後記する実験によって確認した（大腸菌の温度感受性RRFについては特願平10-14747号及びPCT/JP98/00734参照）。このことから、ホウレン草のRRFのどの部分が大腸菌の温度感受性RRFを阻害するかを調べれば、抗菌剤の探索に極めて重要な情報となり得る。この事実はRRFをターゲットとした抗菌剤の作製に極めて重要な知見であるといえる。ホウレン草のRRFに関するこれらの情報は、この大腸菌RRF機能への阻害作用を有するホウレン草RRFの構造が考えられるのは勿論のこと、今後この二次元、三次元構造解析および阻害メカニズムを究明し、RRF阻害による次世代抗生物質及び除草剤開発に、とくにラショナルドラッグデザインにより抗菌剤を開

発する際の一つの指標として、極めて重要な意義を有する。以下、実験例により本発明をより詳細に示す。以下に示す実験例はあくまでその詳細な解説を目的とするものであり、他の方法を制限するものではない。

## 【0011】

## 【実験例】【実験例1】

ホウレン草からのfrr遺伝子の同定を行った実験例本発明におけるホウレン草frr遺伝子の同定は当初、ホウレン草のエンベロープに発現している未知の蛋白の10遺伝子をクローニングする為に、葉綠体のエンベロープ膜に対する抗体を用いてλgt11に入れたホウレン草cDNAライブライ（計1.5×10<sup>5</sup>）より検索したことに始まる。検出されたポジティブクローニングを精製した後、λgt11クローニングサイトの両末端に対するプライマーを用いてPCRを行った。この際3種の異なるクローニングが得られたが、それぞれの5'末端は同じものであった。また、この得られたインサートの長さは約1.1Kbpであった。この得られた配列を用いて作製したα-32Pラベルプローブを用いて、ホウレン草の20葉に含まれる全RNAについてノーザンプロットを行ったところ、ほぼ同じ長さのmRNAが検出された（図1のA）。すなわち得られたcDNAはこの遺伝子の全配列を含むものであったと考えられる。この得られたインサートcDNAを制限酵素KpnI/SacIで切断した後にベクターpUC18へ導入しシーケンスを行った結果を配列表1に示す。

【0012】この得られたアミノ酸配列を用いてgene bankを検索した結果、大腸菌のRRF遺伝子のアミノ酸配列（Ichikawaら 1989, J. B. 30 Biol. Chem., 264: 20054-20059）と非常に高い相同意を有していることが分かった。また他にもこの遺伝子のアミノ酸配列や大腸菌RRF遺伝子のアミノ酸配列と非常に高い相同意を有するアミノ酸配列も見つかり、特にDaucus carota (Genebank accession number X72384)のglycine-rich nuclear located protein (NL P)やHaemophilus influenzae (Fleischmannら 1995, Science, 269: 496-512)、Mycoplasma genitalium (Fraserら 1995, Science, 270: 397-403)、Synechocystis sp. PCC6803 (Cyanobase accession number s110145)の3種の原核生物のRRF遺伝子のアミノ酸配列と比べ良好保存されていた。大腸菌RRF遺伝子のアミノ酸配列と比べこのホウレン草RRF様遺伝子のアミノ酸配列のC末端部（アミノ酸87から271残基）のみを比べると46%の同一性（66%の相同意）となつてはいるがN末端が異なるので細菌特異的又は植物

特異的な抗 R R F 剤の構造は充分可能性があると考えられる。従ってこの発見は産業上非常に重要であると考えられる。ホウレン草 R R F 様遺伝子のアミノ酸配列とニンジンの R R F のアミノ酸配列は 7.4 % の同一性 (8.9 % の相異性) を有している。また、酵母真菌の R R F と予想されている遺伝子 (Ouzounisら 1995, Protein Sci. 4: 2424-2428) のアミノ酸配列は大腸菌 R R F のアミノ酸配列と比較して 25 % の同一性 (4.6 % の相異性) を有し、ホウレン草の R R F 様遺伝子のアミノ酸配列と比較して 21 % の同一性 (4.5 % の相異性) を有している (配列表 2)。

【0013】このホウレン草 R R F 様遺伝子は大腸菌のものと比べると、その N 末端において 8.6 アミノ酸残基分が長く付け加えられた様になっており、解析の結果この部分の配列はミトコンドリアやクロロプラストへの局在を示すターゲッティング配列を示していることが分った。

#### 【0014】【実験例 2】

(特に光合成を行なう組織において) 単一のホウレン草 R R F 様遺伝子の検出を行った実験例

得られた c DNA をもとにしたプローブを用いてホウレン草ゲノム DNA についてサザンブロッティングを行ったところ、単一の遺伝子が検出された (図 1 の B)。さらにホウレン草のさまざまな組織から得た全 RNA を用いてノーザンブロッティングを行った結果、子葉と葉においてはその発育のあいだ恒常にこの遺伝子を発現していることが分かった (図 1 の C)。古い葉や子葉における発現は、若い葉における発現と比べると若干少ないととも観察され、hypocotyledon においては明らかに発現していないことが観察された。これらのことから、この R R F 様の遺伝子の発現は特に光合成を行なう組織に制限されていると考えられる。しかし暗所にて育てたホウレン草の葉においても発現が観察されたこと (図 1 の D) は、この発現が組織特異的ではあるが光の刺激とは無関係に起るものであることを示している。

#### 【0015】【実験例 3】

大腸菌におけるホウレン草 R R F 様蛋白の過剰発現とその精製及び抗体作製を行った実験例

pET-15b プラスミドを用いてリコンビナントホウレン草 R R F 様遺伝子産物の過剰発現を大腸菌にて試みた。IPTG による発現誘導 2 時間 30 分後大腸菌抽出液を調べたところ、可溶性蛋白の 20 % ほどの割合でリコンビナントホウレン草クロロプラスト局在 R R F 様蛋白 (以下 c p R R F H と記述) が発現しているのが観察された。また同時に、上記のものよりもやや分子量の小さい蛋白の過剰発現も観察され、この両者の蛋白を含む分画をアフィニティーカロマトグラフィーで精製した (図 2 の A)。この分画に存在するホウレン草 R R F 様蛋白を CM-Trisacryl カロマトグラフィーに

分離した (図 2 の B)。以上の操作により分離精製されたホウレン草 R R F 様蛋白を用いて免し抗体を得た。得られた抗体はアフィニティーカロマトグラフィーで精製し、ウエスタンブロッティングと免疫組織化学実験に用いた。

#### 【0016】【実験例 4】

ホウレン草 R R F 様蛋白のクロロプラストへの局在を示した実験例

前述の大腸菌で過剰発現させた R R F 様遺伝子産物に対する抗体を作製し、葉の抽出液を用いてウエスタンブ

ロッティング解析を行った (図 3 の A および図 3 の B) ところ、配列から予想された分子量 (30, 300 ダルトン) やりや小さいサイズ (26, 500 ダルトン) のバンドが検出された。これは、前述の通りそのアミノ酸配列から N 末端部はクロロプラスト局在のターゲッティング配列であり、ここを含む前駆体の形で発現され、目的とする器官へ移行した後、その部位は切断分解されて R R F として活性を持つ形になると予測したことと一致するものであった。図 3 の A は、ホウレン草 R R F 様蛋白の発現をさまざまな細胞成分内で見たものである。ホウレン草の葉の各細胞成分分画抽出液を用いて行ったウエスタンブロッティングの結果、このホウレン草 R R F 様蛋白はクロロプラストとミトコンドリアにおいて検出され、葉の全抽出液と比較してそのほとんどはクロロプラストに存在していることがわかる (図 3 の A)。

#### 【0017】【実験例 5】

クロロプラスト内で R R F 前駆体が R R F にプロセシングされることを示した実験例

図 3 の A に示す様にホウレン草 R R F はクロロプラスト内においてはストローマに多く存在し、エンベロープ膜には少なく、チラコイド分画からは全く検出されなかつた。さらに in vitro で生成されたホウレン草 R R F 様蛋白前駆体と精製エンドウ豆クロロプラストを用いて、クロロプラスト内におけるプロセシングを証明する実験を行った (図 3 の B)。この実験で生成された前駆体蛋白 (分子量 35, 000 ダルトン) は、上記 (図 3 の A) のウエスタンブロッティングによりクロロプラストやミトコンドリアから検出されたものと同じ分子量 (26, 500 ダルトン) で検出された。換言すれば、

エンドウ豆のクロロプラストはホウレン草の R R F 様前駆体蛋白をプロセシングすることが証明された。なお、このプロセシングを受けた蛋白は Thermolysin 处理後も検出されたことから、クロロプラストへ取り込まれクロロプラスト内にプロセシングを受けたことがわかる。これらの事実により、ホウレン草 R R F 様前駆体蛋白はクロロプラストへ移行した後、そのクロロプラストターゲット配列である N 末端部の切断プロセシングを受けることが明らかになった。

#### 【0018】【実験例 6】

ホウレン草クロロプラストから R R F 様蛋白を精製した

## 実験例

図4に示す実験では、ホウレン草クロロプラストストローマからホウレン草RRF様蛋白の精製を行った。大腸菌において一過性発現をさせたRRF様蛋白に対する抗体を用いたCM-T r i s a c r y lカラムにより、単一のポリペプチドすなわちホウレン草RRF様蛋白を精製溶出させた。この際、3Kgのホウレン草の葉より0.3mgのRRF様蛋白を精製出来たが、これはストローマ蛋白の2000万分の1にあたり、このホウレン草RRF様蛋白がマイナーなクロロプラスト蛋白であることがわかる(図4のA)。この精製ホウレン草RRF様蛋白におけるN末端のアミノ酸配列を調べたところ、ATMEEVEAEKであり、これは前述したcDNAより予想されるアミノ酸配列の79から8残基と合致した。すなわち、一度前駆体蛋白として発現したものがプロセシングを受けて機能蛋白となるという事実を裏付けるものである。このプロセシング後のホウレン草RRF様蛋白の分子量は2.1, 8.3ダルトン(19.9アミノ酸残基)であり、上記事実より前駆体蛋白の7.8アミノ酸残基までがクロロプラスト局在部位でプロセシング後切断される部分と定義できる。

## 【0019】[実験例7]

ホウレン草RRF様蛋白が大腸菌の中で機能できないことを示した実験例

RRF遺伝子変異大腸菌株を用いて、ホウレン草RRF様蛋白で大腸菌RRFの機能を補えるかを見る実験を行った。方法は以下の通りである。染色体上のfrfr(RRFをコードする遺伝子)のフレームシフト変異のそぞのまでは発育能を持たない大腸菌株LJ2708は、その発育に野生型frfr遺伝子を持つプラスミド(pHEN1054sacBneo)を必要とする。この大腸菌株に、ホウレン草RRF蛋白をコードする遺伝子のうち成熟型RRF(切断分解後機能を持つと思われる部分)をコードしている遺伝子を導入したプラスミド(pKK233-2RRFM)を導入し、インコンバチビリティの理論を用いてホウレン草のRRFが大腸菌で機能を発揮するか否かを検討した(表1)。この表に示す

ホウレン草RRF遺伝子の大腸菌中の機能

\*されている様に、大腸菌が生存するためにはホウレン草のRRFが存在しても大腸菌のRRFを必要とし、ホウレン草のRRFは大腸菌中で機能しないことが示された。

## 【0020】[実験例8]

ホウレン草のRRFの大腸菌における発現は大腸菌に対してRRF阻害致死作用を有することを示す実験例表2において、ホウレン草RRF様蛋白は大腸菌温度感受性RRF遺伝子変異菌株の発育を阻害することを示している。すなわち、大腸菌株にホウレン草RRF様遺伝子を含むプラスミドを導入し発現させた結果、その宿主細胞が温度感受性RRF遺伝子変異株を持つ場合には、宿主細胞が野生型RRF遺伝子を持つ場合に比べて、1/5の5割分の1の発育能しか示さなかった。プラスミドの導入を行ない又はホウレン草RRFの発現をさせない条件ではほぼ正常の発育を示した。

【0021】また、このホウレン草RRF様遺伝子を含むプラスミドは野生型RRF遺伝子を持つ大腸菌中では安定であるが、温度感受性RRF遺伝子変異株を持つ大腸菌中では不安定であった(図5)ことからも同様のことが分かる。この実験で宿主大腸菌はlacI<sup>+</sup>遺伝子を持つ。その為ホウレン草RRF様遺伝子の発現にはIPTGの添加による誘導を必要とするが、このようにその発現の誘導が行われない条件下においても温度感受性RRF遺伝子変異株を含む大腸菌によるホウレン草RRF様遺伝子を含むプラスミドの排除が行われた。このことは微量のホウレン草RRFでも温度感受性の大腸菌のRRFを低温に温度感受性RRFの働く温度)においても阻害し、菌の生育を防ぐことを示す。また、大腸菌に対するホウレン草RRFの影響を更に詳しく調べる為に図6に示す実験を行った。すなわち、静止期または増殖期の温度感受性RRF遺伝子変異株であるLJ2221においてホウレン草RRF様遺伝子の発現を誘導したところ、いずれの状態でもその生育が阻害され殺菌作用を示した。

【0022】

【表1】

ホウレン草RRF遺伝子の大腸菌中の機能

導入されたプラスミドの持つfr遺伝子	導入されたプラスミド	研究された形質転換体の数
pKK233-2RRFM	ホウレン草	32
PER2	大腸菌	16
pUC19	なし	16

受容体がもともと下に示したプラスミドを持っていたときに野生型インサートを持つColE1レブリコンを保持していた形質転換体コロニーの%  
ColE1レブリコン+WT-fr  
+WT-fr pSC101レブリコン+  
(ストレインLJ2708) WT-fr  
(ストレインLJ2211)

LJ2708とLJ2211の大腸菌について、pKK233-2RRFM(ホウレン草RRF様遺伝子を含

むColE1レブリコン、アンビシリン耐性遺伝子を持つ)、pRR2(E. coli frfrを含むColE

Iレブリコン、アンビシリン耐性遺伝子を含む)、pU C19 (Col E Iレブリコン、アンビシリン耐性遺伝子を含む)の三種類のプラスミドを導入し、それぞれ形質転換を行った。形質転換を行った大腸菌はアンビシリ\*ホウレン草RRF様遺伝子の大腸菌の温度感受性Irrr遺伝子変異株での機能

受容株	受容株中の frr	受容株中の lacZの存在	選択時 のIPTG 添加 量	50ngホウレ ン草RRF クローニング された 形質転換 体の数	ホウレン草R RFクローニ ングの効 率
MC1061	野生型	-	-	$1.0 \times 10^4$	0.5
LJ14	ts - frr14	-	-	$5.4 \times 10^3$	$3.2 \times 10^{-1}$
LJ2848	野生型	+	-	$2.0 \times 10^4$	1
LJ2221	ts - frr14	+	-	$1.7 \times 10^4$	1
LJ2848	野生型	+	+	$8.4 \times 10^3$	0.4
LJ2221	ts - frr14	+	+	$6.9 \times 10^3$	$4.1 \times 10^{-1}$

大腸菌株MC1061, LJ14, LJ2848, LJ2221にホウレン草RRF様遺伝子を含むプラスミド(pKK233-2RRF、アンビシリン耐性遺伝子を含む)を導入し形質転換を行った。形質転換された大腸菌株はアンビシリで選択し、表中に示した条件下においてその発育したコロニー数よりプラスミド50ngあたりのコロニー数を計算して示した。

【0024】以上のように、ホウレン草RRF様蛋白は野生型RRFに弱い阻害作用を示すが温度感受性の大腸菌RRFには極めて強い阻害作用を示し、これは温度感受性大腸菌RRFが充分機能し得る温度においてみられた。このことは、大腸菌のRRFを特異的に又非可逆的に阻害すると大腸菌の静止期、成長期に関係なく阻害作用を有すること、即ち、細菌のRRFの阻害剤の中には

\*を含む培地にて32°Cで培養し、それらの新たに導入されたプラスミドの存在を確認した。

【0023】

【表2】

静止期においても殺菌作用を有するものが存在し得ることを示唆している。従って、上記の実験結果は、本発明により同定されたホウレン草のアミノ酸配列から出発して、細菌のRRF阻害剤のlead compoundsが得られる可能性を強く示すものであって、従来にない新規な抗菌剤の開発にとって極めて重要な意義を有するものである。

【0025】

【配列】

配列番号：1

配列の長さ：1109 (核酸)、271 (アミノ酸)

配列の型：核酸及びアミノ酸

配列

12

TGTCTCATCACCAAACTCAGCTCTTAATGGCGGACATCGCATCTTCTCTGCAACTCTT  
 M A S S L L S S A T S (60)  
 11  
 ATCTTCATCTCTTCTAGCGCTCGCAACTCTCTGGCTCTCTCTCAGGGTGTGGCGATATTGG  
 Y L H S F R R R N S C V S L Q G V S D M (120)  
 31  
 ATGGTAATATTGCGGAGCAACCGTTCTAGCTGGAGGTCTCTGCTAACATGTTAGGA  
 C H N I A R T T G G T T T G G R S A N Y V R (180)  
 51  
 TGGATTGTGGGTGTAGAAAGTTCTGGAGGCTOTYGTGTTGAAAACATGCAAAACC  
 N D C G V V K K P S G K A V V V V K Q L Q N (240)  
 71  
 GAGCAGGAGACTTTAGGTGTCAGACTATGGGGAGTGTGCAAGGCTGAAAAGATGCTGTAG  
 R A G T F R C A T M E V V V V V V S L I (300)  
 91  
 AGACGAACACAAAACAAAAGGAAAGGAGACTATGAAACATACGCTCAATTCTATT  
 E T T E T Q R M E K T I T R S M F H (360)  
 111  
 CAGTAAGGCAAAATCGAGCTAGTCAGCAATGTTGGATCGGAGTAGGGTTGAGTACTATG  
 S V R T H R A S P T D L D R I E V E Y T (420)  
 132  
 GAACTCTCTGTCAGCTCTGAAAAGCTGTCAAATTAGTAGACCCAGATGCTAGTTCCCTT  
 G T F V S L K S I A Q I S T F D A S S L (480)  
 151  
 TGGATACCATATGACAAATCAAGCTGAGGGCATAGAGGAAAGCCTAGTTACCTCTC  
 L I S P Y D K S S L K A T E K K A Z Y T S (540)  
 171  
 AACCTGGTGTAGTCCTAAATAGCAGGTGGAGTTACCGGCTGTGCTCCCTCCATTA  
 Q L G V S V V V V V V V V S L P P L (600)  
 191  
 CTTCAGATAGAAGGAGGGAGCTTUCGAAAGTTCTCTTACACTTCAGAGRAGGGAGG  
 T S D K R E K K L A V V V S K L A B E G K (660)  
 211  
 TTGCACTGGAGAACATAGAAGAGATGCTCTGAAAATCTTATGAAAACCTGGAGGAAA  
 V A V R N I R D K L K S Y E K L E K E (720)  
 231  
 AAAAGCTTCGAGAGATAATGTGAAAGACCTATCGCTGTGAGTGGAGGATGACCGATG  
 K L I S E D H Y D K T D L S A D L Q K L T D (780)  
 251  
 AGTACATGAAAGAAGGTTGAGCTTACATCTACAGAGCAGAAAGACAGGGAGTATGTAAGCT  
 E T M K K V E S I Y K Q K E Q L S L M K V (840)  
 271  
 AAAGCCAGTGAAATCACATAAAACTTGCCAACTTGCCAAACTTGAAATTCCGATGTCCTT  
 AATGGTAAACATGATGCTGGCTTGTGTTGCACTTCTCTGTAATACACTACAG  
 ATCCCCGGAAATAGGGCTTGTGATTATCACAAACTCGGTAGAATGATTACACCAAGAA  
 TTTGGCTACTTTAATTGTAAGGTTCTGGGAGATGGTACCCATTAAATGTCAAA  
 TGTTCATCATAAAAAAA  
 (1080)  
 (1109)

### 【0026】配列表1

ホウレン草 *R R F* 様遺伝子の c DNA とアミノ酸配列  
終始コドンは \* で示してある。下線は、後述するホウレン  
草 *Kクロロバスト* より精製し解析した天然のホウレン  
草 *R R F* 様蛋白の N 末端 10 アミノ酸残基の位置を示し  
てある。太字は、これらより予想される成熟ホウレン草

### RRF様蛋白に相当する部分を示す

【0027】配列番号：2

### 配列の型：アミノ酸

### 配列の特徴

#### 結論與建議

140

cpRRFH	EKSLLIETKT KERMEKTIET IRSNPFNSVRT NEASPTMLDR IEVEYYGTPV	135
NLRRFH	EKSLLIEKSV. KERMEKTIET VKASFNSIRT ?RSNPFMLDK IKVEYYGTP	93
EcoRRF	MISDRIKDA. EVRMDRKVEA FKTQISKIRT GRAPSLLDG IVVEYYGTP	49
HinRRF	MLNQIJKDA. QDRMEKSLER LKGHISKIRT GRACPSLLDA IQVEYYGAT	49
SynRRF	MKLAEL. KDMQMKSVEA TQRSFTNTKIRT GRANASLLDG ITVEYYGAT	46
MgeRRF	MTKARYIDFY KQAAQDKKIQW LKSELTKIRT GRPNPKIFDN LLIESYQEM	50
ScRRFH	IDVNELLKKA ETQPKTKLRI QKQHNEZIKQ GNFNPKVFN5 LVFGHNRKFT	95
Consensus	*M*K *E * *RT R* P *LD I VHYG*	50

cpRRFH	SLKSLIAQIST PDASSLLISP YD.KSSLKAI EKAIVTSQLG VSPNNNDGEVI	184
NLRRFH	SLRSLLAQIYST PDASSLLVNP YD.KSSLKDI EKAIVNSDLG ITPNNDGVI	142
EcoRRF	PLRQLASATV EDASRTLKVIV FD.RSLISAV EKALTSDELG LNPNSAGSDI	98
HinRRF	PLRQLANVVA EDARTLAVTF FD.RSLISAV EKALTSDELG LNPNSAGSDI	98
SynRRF	PLISLATAITGFD PDASTIVIQP FD.MSISGTO EKAISLSDLG LTPNNNDGKV	95
MgeRRF	PLISLQAQVTI NPPRHEIIKIP FDPKSNTINAI YSEIQRANIG VQPVIDGEKI	100
ScRRFH	DIATTSLLKGK NALLITYVFDP KDVKTVGIV LAANLNLTPE RVPNNDLQL.	144
Consensus	*L* *A ** D* *** * D* S* ** EKAI S LG * P G I 100	

cpRRFH	RLLSLPPLTSD RRKELAKVVS KLAEEGKVAV RNIRERDAKS YEKLEKEKKL	234
NLRRFH	RLLSLPPLTAD RRKELAKVVA KQAEKGKVAV RNIRERDAKS YDKLEKEKKL	192
EcoRRF	RVPVLPPLTEE RRRDLTKIVM GEAEQARVAT RNVRDANDI VCALLKOEKI	148
HinRRF	RVPVLPPLTEE RRRDLTKIVK GEAEQGKVAV RNVRDANDI VCALLKOEKI	148
SynRRF	RLNIPPLTAE RRRKELVKGWAG KLAEEGKVAV RNIRERDAVDE VRKQEKNSDI	145
MgeRRF	RVNFPGCIQTE TRLKENIKHVK KLAEEGKVAV RNIRERDAVDE VQVRRDA... LOMIKNDNH.	146
ScRRFH	KVSLPPLPTTE SRRLKVAKDLK RVFEEYKQSS LKDSLGTIRG SILKEFKSPK	194
Consensus	*E* *P LT * RR**L K*V *E **VA* RN*REDA * K* * 150	

cpRRFH	SEDNVKDLSA DLQKLTDDEYM KKVESIYKQK EQELMKV	271
NLRRFH	SEDNVKDLSA DLQKVIDEYI KKVIDSFVKQK EKELMTV	229
EcoRRF	SEDDCRDLSQD DVQKLTDRAI KXIEAALADK EAELEMQF	185
HinRRF	SENEQHKEE EIKIKITDII KKVIDEVLDK EKELMDF	185
SynRRF	SEDEARDLQE EIKQLTDQST KRIDELLAAK EKDITTV	182
MgeRRF	NEDLENSLKA EIEKINKNYS NQLEKEIQKDE EKLLETTI	183
ScRRFH	KDDAVRKAAER DLEKLHKDQYV NKLUHQPKYK EKSTIVK	230
Consensus	SED * * *QK* D K*** * K E EL*	187

## 【0028】配列2

予想されるホウレン草RRF様アミノ酸配列と他種RRFを含むアミノ酸配列との比較を示す。

NLRRFH: *Daucus carota*の核蛋白D2 (genbank accession number X72384)

EcoRRF: 大腸菌RRF (J. Biol. Chem., 264, 20054-20059, 1989)

HinRRF: *Haemophilus influenzae* RRF (Science, 1995, 264, 496-512)

SynRRF: *Synechocystis* sp. P

CC6803 (Cyanobase accession number s110145)

MgeRRF: *Mycoplasma genitalium* RRF (Science, 1995, 270, 397-403)

ScRRFH: 酵母様真菌ミトコンドリアRRF (Protein Sci., 1995, 4, 2424-2428)

## 【0029】配列番号: 3

配列の型: 核酸及びアミノ酸配列

Cons	W * * A N Y V *	9
S	E C N I A R T N V S V W R S S A N Y V R	51
So	A A T G T A A T T G C G C G A A C C A A C G T T C A G T C Y G G A G G T C T C T G C T A C T A G T G A G G A	180
Dc	C T T G G A C T G C G C T G C A A T T A T G T C A A A A	30
Dc#	W T A A A N Y V K	9
Cons	G K F * K * V V * Q	29
So	M D C G V V K F S G K A V V V V K Q L Q N	71
So	T G G A T T G G T G T A A G A G T T T C T G G A A G G C T G T G T G T G A A A C G A T G C M A A A C C	240
Dc	T T A A J G T G G C C A C C G G A A A A T T G C C C G C A A A C T G T G T T T G T C A C R A - - - R A G A - -	84
Dc#	I K V G T G K F A R K T V V L S Q - K -	27
Cons	R * G T * C A T M E E * K A E K S L I	49
So	R A G T F R C A T M E E P V R A E K S L I	91
So	G A G C G G A C T T T A G G T G C A A C T A T G G A G G A T G C G A A G C T G A A J A G T C G T G A T A G	300
Dc	G A A C G G M A C C C T G A G G T G C A A C T A T G G A A G A G T T G A G C T G J A A A A T C T T G A T T G	144
Dc#	R T G T L K C A T M E E I E A E K S L I	47
Dc	*	*
Cons	E K R M E K T I S * * F N	69
So	S T N T K Q R M E K T I E T I R S N F N	111
So	A G A C G A A C C A A A A C A A G G A T G G A A G A G C T A T T G A A C A A T A C C G T C A A A T T C A A T	360
Dc	A G A A A G T G T T A A G A A A G / A T G G A A A A G / A T G G A A A A G / A T T G A A A A A G T C A A A G C G A A G T T C A A C T	204
Dc#	E K S V K E R M E K T I E H V K A S F N	67
Dc	M S K Q V S T	7
Cons	S * R T - ? R * P M L D * I V E Y Y	89
So	S V R T - N R A S P T N L D R I E V E Y Y	131
So	C A G T A G G G A C C A - A A T C G A C T G A T T C C A A C A T G T G G A T C G G A T A G A G G T T G A S T A C T A T K	420
Dc	C C A T T A G G A C G G A A C G T T C A A T C C G A T A T T G T G A T A G A T C A A G G T T G A S T A C T A T K	264
Dc#	S I R T ? R S H P D M L D K I K V E Y Y	87
Dc	P L G R E R S H P D M L D K I K V E Y Y	27
Cons	G T P S L * S I A Q * S T P D * S S L	109
So	G T P V S L K S I A Q O I S T P D R A S S L	151
So	G A A C T C T G C A G C T G A A A A G C A T T G G T C A A A T T A G T A C C C G A G N C T A G T C C C T T	480
Dc	G A A C T C T A C T G C T T A A A G G C A T A G G T C A A A T C A G T A C T C C T G A T T C G A G T T C T C C	324
Dc	G T P T S L R S I A Q L S T P D S S S L	107

## 【0030】配列表3

ホウレン草RRF様遺伝子と *Daucus carota* の *glycine-nuclear located protein* との遺伝子配列とアミノ酸配列の比較を示す。

So: ホウレン草RRF様遺伝子

で用いた。

B: サザンプロッティングにより、ホウレン草様RRF 遺伝子がゲノムDNA上にすることを制限酵素EcoR I (レーン1) と EcoRV (レーン2) 、 Hind III (レーン3) を用いて示した図である。

Dc: *Daucus carota* の *glycine-nuclear located protein* 【図面の簡単な説明】

C: ノーザンプロッティングにより、発芽20日後のホウレン草の子葉(C)、葉(L)、hypocotyls(H)、根(R)において、特に光合成組織特異的に発現することを示した図である。L1とL3は夫々古い葉と若い葉を用いた。

【図1】ホウレン草RRF様遺伝子のノーザンプロッティングとサザンプロッティングによる解析を示した図。

D: ノーザンプロッティングにより、ホウレン草RRF 様mRNA発現が、光の刺激により影響を受けないことを示した図である。発芽条件は以下の通りである。

A: ノーザンプロッティングにより、ホウレン草RRF 様遺伝子のmRNAが約1.1kbであることを示した図である。葉緑体のエンベロープ膜の葉緑体に対する抗体を用いて *λgt11* に入れたホウレン草cDNAライ

ブリより検出したポジティブクローンをプローブとし 50

し用いて、暗所にて18日間(D)、  
レーン1: 暗所にて14日間の後明所にて4日間(D+L)、

レーン3：明所にて18時間（L）とした。

上記は全て、ホウレン草RRF様遺伝子のスクレオチド269から477をα-32Pでラベルしてプローブとした。

【図2】大腸菌株B834 (DE3) pLysSにおいて発現ベクターpET-15bを用いて、リコンビナントホウレン草RRF様蛋白を過剰発現させ解析した図。A：大腸菌全抽出液と過剰発現されたホウレン草RRF様蛋白をSDS-PAGEにて解析した。

レーン1：IPTGによる発現誘導前の大腸菌全抽出液、

レーン2：IPTGによる発現誘導2時間30分後の大腸菌全抽出液、

レーン3、4：IPTGで誘導を行った大腸菌全細胞抽出液からニッケルアフィニティクロマトグラフィーにて精製したものの（レーン4）とそのフロースル（レーン3）、

レーン5：分子量マーカー

B：CM-Trisacetylクロマトグラフィーにてホウレン草RRF様蛋白を精製しSDS-PAGEにて解析した図である。

レーン1から4：クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼを含む分画、

レーン5から8：ホウレン草RRF様蛋白を含む分画。

【図3】A1及びA2：ホウレン草RRF様蛋白の細胞内局在を観測した図。

ホウレン草の葉の抽出液を成分分画してSDS-PAGEを行い、精製抗リコンビナントホウレン草RRF様蛋白抗体によるウエスタンブロッティング（A1）とクレマシーフリリアントブルー染色（A2）を行った。

レーン1：葉の全抽出液（LE）、

レーン2：ミトコンドリア（Mito）、

レーン3：クロロプラスト（Chl）、

レーン4：エンベロープ（E）、

レーン5：ストローマ（S）、

レーン6：チラコイド（T）、

レーン7：分子量マーカー

B：精製エンドウ豆クロロプラスト内でのN末端領域を含むホウレン草RRF様蛋白の修飾をウエスタンブロッティングにより観測した図。

レーン1：標識蛋白、

レーン2：標識蛋白導入後のクロロプラスト抽出液、

レーン3：標識蛋白導入後のクロロプラストを、クロロプラスト表面（細胞膜側）に存在している標識蛋白を除く為にthermolysinで処理したもの。

【図4】ホウレン草クロロプラストより天然のホウレン草クロロプラストRRF様蛋白を精製し、ウエスタンブロットにより解析した図。

A：ホウレン草ストローマ抽出液のCM-Trisacetylクロマトグラフィーによる分画を示す図である。

B：全ての分画をSDS-PAGEによる解析図。

レーン1：ストローマ抽出液（S）

レーン2から8：それぞれCM-Trisacetylクロマトグラフィー精製における溶出分画35, 37, 39, 41, 43, 45

レーン9：大腸菌中において一過性発現させて精製したヒスチジンタグホウレン草RRF様蛋白（C）（B）のSDS-PAGEについて、抗ホウレン草RRF様蛋白ピロリコーナル抗体を用いて行ったウエスタンブロッティングによる解析図。

【図5】ホウレン草RRF様遺伝子を持つプラスミドが、大腸菌温度感受性RRF遺伝子変異株において不安定であることを示すグラフ。温度感受性RRF遺伝子変異（ts-frr）を持つ大腸菌LJ2221（左）と野生型RRF遺伝子（wt-frr）を持つ大腸菌LJ2846（共にlacIQ遺伝子を持つ）をホウレン草RRF様遺伝子を含むプラスミドpKK233-2RRFM（上段）もしくはそのベクターpKK233-2（下段）で形質転換させアンビシリンを含むLB液体培地にて0.05ABS（OD 540nm）に合わせた後、それぞれ表記の時間32°C（温度感受性RRFが機能できる温度）で培養した。その後、それぞれアンビシリンを含むLAアガー（●）もしくは含まないLAアガーバー（○）にて32°Cで一夜培養してそのcolony forming unitを求めた。縦軸はCfu/ml、横軸はTime (hours)を示す。

【図6】A：ホウレン草RRF様遺伝子の発現が、温度感受性RRF遺伝子変異株であるLJ2221の静止期にある細胞へ与える影響を示すグラフ。大腸菌温度感受性RRF遺伝子変異株LJ2221（ts-frr）

（左）もしくは野生型RRF遺伝子を持つ大腸菌株LJ2846（wt-frr）（共にlacIQ遺伝子を持つ）にホウレン草RRF様遺伝子を含むプラスミドpKK233-2RRFM（○●）もしくはそのベクターpKK233-2（□▲黒四角▼）を導入した。それぞれ

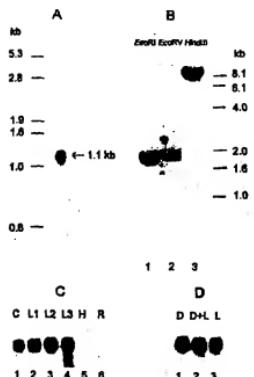
アンビシリンを含むLB液体培地にて0.05ABS（OD 540nm）に希釀し、5mMのIPTG存在下（●▲黒四角▼）もしくは非存在下（○□）で表記の時間培養した。その後各培養液よりアンビシリンを含むLAアガーバーにて一夜培養してそのcolony forming unitを求めた。縦軸はCfu/ml、横軸はTime (hours)を示す。

B：ホウレン草RRF様遺伝子の発現が温度感受性RRF遺伝子変異株LJ2221の増殖期にある細胞へ与える影響を示すグラフ。ホウレン草RRF様遺伝子を含むプラスミドpKK233-2RRFMを導入した大腸菌温度感受性RRF遺伝子変異株LJ2221（lacI<sup>9</sup>遺伝子を持つ）をLB液体培地にて0.00005ABS（OD 540nm）に希釀した後、4時間（左）、6時間（中央）、8時間（右）にて培養した。

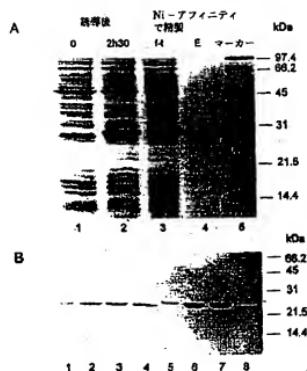
その後それぞれの培養液を二分して5mMのIPTG存在下(+)もしくは非存在下(○)で表記の時間培養し、(A)と同様にしてcolony forming

unitを求めた。縦軸はCfu/ml、横軸はTime (hours)を示す。なお、培養温度はすべて32°Cで行われた。

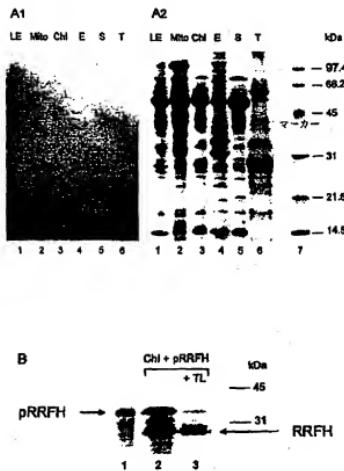
【図1】



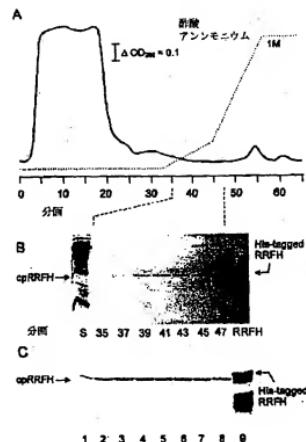
【図2】



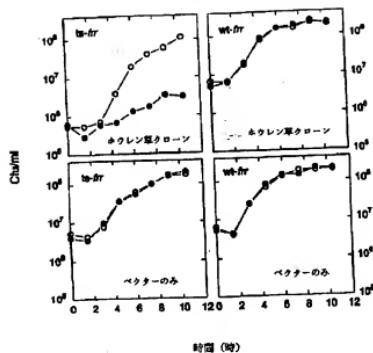
【図3】



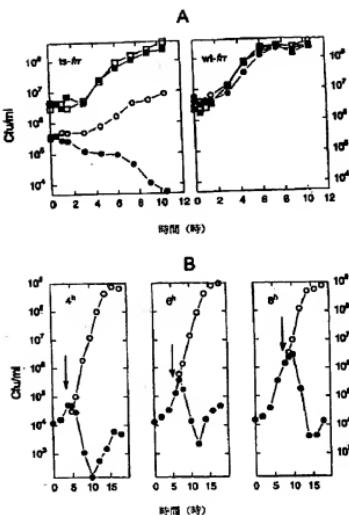
【図4】



【図5】



【図6】



フロントページの続き

(51) Int. Cl. 6

C 12 R 1:19)

識別記号

F I